

国際高等研究所 研究プロジェクト

「設計哲学－俯瞰的価値理解に基づく人工財の創出と活用による持続可能社会を目指して」
2015年度第3回（通算第6回）研究会プログラム

日 時：2015年 12月11日（金）13:30～17:30
12月12日（土） 9:30～12:00

場 所：グランフロント大阪 大阪大学環境イノベーションデザインセンター（タワーC 9階）
(大阪市北区大深町4-1)

出席者：（12人）

研究代表者	梅田 靖	東京大学大学院工学系研究科教授
参加研究者	岩田 一明	大阪大学名誉教授・神戸大学名誉教授
	上須 道徳	大阪大学環境イノベーションデザインセンター特任准教授
	小野里 雅彦	北海道大学大学院情報科学研究科教授
	思 沁夫	大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授
	住村 欣範	大阪大学グローバルコラボレーションセンター准教授
	服部 高宏	京都大学国際高等教育院教授

RA（リサーチアシスタント）

上松 宏紀 大阪大学大学院基礎工学研究科学生

コメンテーター

木下 泰宏 東京工業大学大学院社会理工学研究科博士課程

話題提供者（ゲストスピーカー）

鈴木 一義	国立科学博物館産業技術史資料情報センター長
原田 大樹	京都大学大学院法学研究科教授

趣旨

これまで、「途上国、新興国における技術の在り方」「途上国、新興国における設計の在り方」に焦点を当てて議論を行ってきたが、今回は、技術、設計を複眼的に捉えるために、途上国、新興国以外のキーワードでの話題提供を2件お願いした。

1件目は、まさにモノではない「制度」というものを設計するという視点から、原田先生から「公共制度設計論の課題」という題目で話題提供を頂いた。

2件目は、「ものづくり」とは何だろうか、「ものづくり」の本質について、鈴木先生から「私説日本のモノづくり文化」という題目で話題提供を頂いた。

12月11日の後半は、継続的に実施している、書籍をまとめあげることを目標にした、これまでの論点整理を行った。今回は特に、前回からの継続課題となっていた、整理の基本的な枠組みについて議論した。

プログラム

12月11日（金）

13:30～15:20

話題提供「公共制度設計論の課題」

原田大樹先生（京都大学大学院法学研究科教授）

概要：

伝統的な行政法学が紛争や訴訟を中心に議論を組み立ててきたのに対して、1990年代以降、法制度設計のあり方を論じる制度設計論の立場が日本でも有力化してきた。本報告では、行政法学が法制度設計を論じる理論的な基盤を明らかにすると共に、具体的な素材として人口減少時代における法制度設計のありかたを取り上げ、公共制度設計論の課題を提示することとしたい。

15:20～15:40 休憩

15:40～17:30

討論：「途上国における技術の在り方」に関する枠組みと書籍の概要作り

12月12日（土）

9:30～12:00

話題提供「私説 日本のモノづくり文化」

鈴木一義先生（国立科学博物館 産業技術史資料情報センター長）

概要：

海外で日本の「モノづくり」が紹介されるとき、かつての「Made in Japan」ではなく、KAI ZEN（改善）とかKANBAN（かんばん）のように、日本語を直接的にそのまま表記する記事を見るようになった。「COOL JAPAN（クールジャパン）」も日本に対する世界の評価や関心の上に成り立つものであるが、同様に「モノづくり」が「MONODZUKURI」として世界的に認められるためには、その日本発で日本独自のモノづくりを分かりやすく内外に伝える必要がある。さてでは「MONODZUKURI」とは一体どのようなものだろうか。私論ではあるが、博物館において日本の技術を研究してきた立場から述べてみたい。

日本のモノづくりは、「わび」とか「さび」と同様に、他国とは異なる所があると、日本人であれば何となく理解し、納得し得ているものであるが、いざ説明しようとすれば、言葉に窮してしまうのではないだろうか。「MOTTAINAI（もったいない）」という言葉も、海外の人によって気づかされた高度成長や大量生産大量消費（大量廃棄）社会の中で、忘れていた日本の古くからの風習を示す。そして改善も、かんばんも、実はある意味、もったいないの実践である。モノづくりの本質とは、表層的には見えなくなつたもったいないのような、日本人にとって当たり前のこと、無意識の中に潜んでいると思われる。その無意識に潜むモノづくりとは、日本という風土と、200年を超える平和な江戸時代に培われ、繋げられてきた文化だと考えている。

経済や科学、技術に限らず、あらゆる分野で否応なしにグローバル化が進む。グローバルに席卷されるローカル（地域・民族）。19世紀、この構図が顕著になり始めた欧米で生まれた概念が「文

化」である。青銅器文明や鉄器文明のように普遍的な価値を持つ「文明」に対し、文化は地域や民族固有の風土や事物、思想からなる農業（Agriculture）を語源に持つ。この文明と文化をどう調和させていくか？この課題に直面した我が国先人の答えが「和魂漢才」である。「和魂漢才」を最初に唱えたのは、菅原道真だと言う。平安時代は、大陸から学び、知識人や技術者を招いて文化を吸収しつつ、日本固有の国風、たとえば仮名文字のような独自の文字体系を生み出した時代である。日本の建築技術の粋を集め、世界一の高さを誇るスカイツリーが作られたが、法隆寺には世界最古の五重塔が千年を超える長い期間、地震や風雪に耐えて立ち続けている。漢才である中国伝来の建造技術は、地震の多い日本で独自に、和魂を以て発展した。中国や西洋が、石や煉瓦を用いた「剛構造」の建造物を発展させたのに対し、日本は木造の「柔構造」建造物を選択した。それは技術の本質が、対象となる地域や人、風土に合わせるものであれば当然のことだ。その風土に根付いた和魂の発想と技術が、今に続く日本の建造物に受け継がれている。本居宣長が「もののあわれ」と表現した、儚く変化する自然や物の移ろいに我々の心が共感し一体化していく、という概念も同時代に育まれた。他である「もの」を想う心は、例え茶道の基本である「気遣い」や「気配り」のような日本の美意識や価値観を育み、江戸時代庶民にまで広がった。それは今、日本の得意とする「ユニバーサルデザイン」の源流であろう。だれもが他を想えるからこそ、「針供養」のように命を持たない道具や器物まで、大切に扱い、感謝の念を持って接してきたが故に、「もったいない」も生まれ、日本のモノづくりも育まれたのである。

電熱器が欧米から導入された時、日本人の食文化は米を炊くために、電気炊飯器を生み出した。今、炊飯器は世界に輸出され、各国で新たな食文化を生んでいる。パソコンのCPUは日本人の発想だが、それは日本では当たり前のように誰もが使うソロバンの代わりになる小型の計算機用に必要なものだった。ソロバン文化が今日のパソコンを生んだといえよう。ウイスキーは、大正末期から製造を始めた日本が、世界五大産地の一つに数えられている。他はアイルランド、スコットランド、アメリカ、カナダ。日本は、英國もしくはその移民者によらない唯一の国であり、その味わいは世界的な評価も高い。戦後にウイスキーを日本社会で飲んでもらうために、アルコールに弱い日本人向けの水割りという飲み方が考えられ、結果的に発祥の英國も驚く素晴らしい香りのウヰスキーが生み出されたのである。風土や文化を纏った日本のモノづくり。それは、相手も驚くほどのモノを作り上げる。

その日本独自のモノづくりの形を柳宗悦は「用の美」と呼んだ。日常にありふれたモノづくり（技）に潜む美である。西洋でも「アート」は技と美の両方を語源に持つが、それは神や支配者に対して作られた物を指す。江戸時代、技術を一部の人々のみが独占し利用した戦国時代が終わり、それまで鉄炮を作っていた職人や匠の技は、広く社会や生活に鋤や鍬となって使われた。また各藩はお互いに競い合いつつも、幕府の存在により、相手を支配、吸収することはできないため、「ナンバーワン」ではなく、他と異なる「オンリーワン」を目指した。近代から現代まで、日本では家電や自動車のような大衆商品を特定の一社が独占的に製造することが少なく、同種企業により微妙な違いを持つ商品が多数存在して切磋琢磨が行われてきた事実も、このような独特の文化・風土を持つ日本社会の連續性から納得できよう。競争しつつ、共存をはかろうとするモノづくりへの考え方、企業の利潤や規模拡大の追求よりも、人のため、地域のため、社会のため、という日本のモノづくりの基本的な部分に大きな影響を及ぼしていると思う。

日本という国が、アジアの中で真っ先に工業化を達成し、世界第2位の経済大国にまでなった理由は、実は我々にとって、あまりに当たり前の、無意識の、ありふれた文化や風土、社会、人の中にあったということを、より明確に意識することが、これまで以上に重要な意味を持つ時代かと思う。モノづくりを世界が認める「MONODZURI」とするために。